

川口さんは、国語の時間に、夏目漱石の作品「吾輩は猫である」を読み、思ったことや考えたことについてグループで話し合いをしています。次の【文章の一部】と【話し合いの一部】を読んで、あとの問いに答えなさい。

【文章の一部】

「ここまでのあらすじ」中学教師の苦沙弥先生の家で暮らすことになった猫の「吾輩」は、ある日、家の裏にある茶島で黒猫の「黒」と出会う。「黒」は大きな体格で、車屋（人力車を引く人）に飼われている乱暴猫である。それ以来、「吾輩」はたびたび「黒」に出くわすようになる。

ある日、例のごとく吾輩と黒は暖かい茶島の中で寝ころびながら、いろいろ雑談をしていると、彼はいつもの自慢話をさも新しそうにくりかえしたあとで、吾輩に向かって下のごとく質問した。「おめえはいままでに鼠を何びきとったことがある。」

智識は黒よりもよほど発達しているつもりだが、腕力と勇氣とにいたってはとうてい黒の比較にはならないと覚悟はしていたものの、この問いに接したときは、さすがにきまりがよくはなかった。けれども事実は事実で、いつわるわけにはゆかないから、吾輩は、

「実はとろうとろうと思って、まだとらない」と答えた。

黒は、彼の鼻の先からびんとつつぽっている長いひげをびりびりとふるわせて、非常に笑った。元来黒は自慢をするだけにどこか足りないところがあった、彼の気焰を感じたようにこのどをころろ鳴らして謹聴していれば、はなはだ御しやすい猫である。吾輩は彼と近づきになってからすぐにこの呼吸をのみこんだから、この場合にも、なまじいおのれを弁護してますます形勢を悪くするのも愚である、いっそのこと彼に自分の手柄話をしゃべらしてお茶をにごすにしくはないと、思案を定めた。そこでおとなしく、

「君などは年が年であるから、だいぶんとつたろう」と、そそのかしてみた。

果然彼は、墻壁の欠所に唸喊してきた。

「たんとでもねえが、三、四十はとつたろう」とは、得意気なる彼の答えであった。彼はなお語をつづけて、「鼠の百や二百は一人でいつでも引き受けるが、いたちってえやつは手に合わねえ。一度いたちに向かつて、ひどい目にあつた。」

「へえ、なるほど」と、あいづちをうつ。

黒は大きな眼をぱちつかせて、いう。

「去年の大掃除のときだ。うちの亭主が石灰の袋を持って縁の下へはいこんだら、おめえ、大きいいたちの野郎がめんくらって飛びだしたと思ひねえ。」

「ふん」と感心して見せる。

「いたちってけども、なに、鼠のすこし大きいぐれえのものだ。こんちきしょうって気で追っかけて、とうとうどぶの中へ追いこんだと思ひねえ。」

「うまくやったね」と喝采してやる。

「ところがおめえ、いざつてえ段になると、やつめ最後っ屁をこきやがった。くせえのくさくねえのつて、それからつてえものはいたちを見ると胸が悪くならあ。」

彼はここにいたって、あたかも去年の臭気を今なお感ずるごとく、前足をあげて鼻の頭を二、三べんなでまわした。吾輩も少々気のどくな感じがする。ちつと景気をつけてやろうと思つて、「しかし鼠なら、君にいらまれては百年目だろう。君はあまり鼠をとるのが名人で鼠ばかり食うものだから、そんなにふとつて色つやがいいのだろう。」

黒のこきげんをとるためのこの質問は、ふしぎにも反対の結果を呈出した。彼は喟然として大息している。

「考げえるとつまらねえ。いくら稼いで鼠をとつたつて——いってえ人間ほどふてえやつは世の

中にいねえぜ。人のとった鼠をみんな取りあげやがって、交番へ持ってゆきあがる。交番じゃ、だれがとったかわからねえから、そのたんびに五銭ずつくれるじゃねえか。うちの亭主なんか、おれのおかげでもう一円五十銭くらいもうけていやがるくせに、ろくなものを食わせたこともありやしねえ。おい、人間でものあ体のいい泥棒だぜ。」

さすが無学の黒もこのくらしいの理屈はわかるとみえて、すこぶるおこったようすで背中を逆だてている。吾輩は少々気味が悪くなったから、いかげんにその場をごまかして、うちへ帰った。

このときから吾輩は、けっして鼠をとるまいと決心した。しかし、黒の子分になって鼠以外のごちそうをあさつてあるくこともしなかった。ごちそうを食うよりも寝ていたほうが気楽でいい。

(夏目漱石「吾輩は猫である(上)」による。)

気焰^{けいげん}燃え上がるような盛んな意気。

御しやすい^{ごしやすい}[〓]思うように扱いやすい。

お茶をにごすにしくはない[〓]ごまかすのが最もよい。

果然彼は、墙壁の欠所に呐喊してきた[〓]ここでは、予想どおり「黒」が誘いに勢い込んで乗ってきた、ということ。

喟然として大息して[〓]ため息をついて嘆いて。

交番へ持ってゆきあがる[〓]当時は、公衆衛生上、鼠退治を奨励し、とった鼠を交番で買い上げた。

【話し合いの一部】

川口 「吾輩は猫である」は、タイトルは知っていましたが、今回読んでみて、とてもおもしろいと思いました。

山本 主人公が猫で、猫の視点で書かれているのがおもしろいですね。自分のことを「吾輩」というのも、少し偉^{えら}そうな感じがして、この猫にびったり合っています。

水田 長く読み継がれている作品だというのが、私もよく分かりました。

青木 インターネット上にたくさんのレビューがあり、現代でも多くの人に読まれているようです。ね。「滑稽」や「ユーモア」というコメントがありました。この場面でもそれが感じられますよ。

山本 この場面では、「吾輩」と「黒」の関係から、それらが感じられます。猫の世界も人間の世界と同じだと思われ、読みながらくすくすと笑ってしまいました。

川口 「吾輩は彼と近づきになってからすぐにこの呼吸をのみこんだ」という表現から、「吾輩」は相手の性格を素早く把握し、それに合わせてうまく関わっているのが分かります。

青木 「黒」が自分の手柄話をしゃべっているのを聞いているときの「吾輩」の様子が、『へえ、なるほど』と、あいづちをうつ。「A」「B」と表現されていますが、私も、「吾輩」は「黒」をうまく扱う要領を心得ていると思いました。

水田 「吾輩」に乗せられていることもしらず、得意気にしゃべっている「黒」の姿が浮かんできます。

川口 まるで人間同士のやりとりを見ているようです。

1 【文章の一部】の——線部「呼吸をのみこんだ」とありますが、この部分の意味として最も適切なものを、次のアからエまでの中から一つ選びなさい。

- ア コツをつかんだ。
- イ 息を吸い込んだ。
- ウ ため息を抑えた。
- エ 発言を我慢した。

2 【話し合いの一部】の A ・ B に当てはまる言葉を、【文章の一部】の中から探し、一文で抜き出さない。

A	B
---	---

3 【話し合いの一部】の~~~~線部『吾輩』と『黒』の関係とありますが、【文章の一部】には、「吾輩」が「黒」を評価している表現があります。「吾輩」は「黒」をどのように評価し、どのような接し方をしていますか。また、あなたは、そのような「吾輩」の接し方をどう思いますか。次の条件1と条件2にしたがって書きなさい。

条件1 【文章の一部】から、「吾輩」が「黒」を評価している表現を引用した上で、「吾輩」が「黒」にどのような接し方をしていることが分かるのかを書くこと。

条件2 条件1のような「吾輩」の接し方について、あなたの考えを具体的に書くこと。

引用するとは、どういうことでしたか。引用するとき気を付けることは、本文中の言葉は省略したり書き換えたりにすることなく、かぎかっこ「」でくくって書くということでしたね。



問題について

「読むこと」 叙述を根拠に自分の考えをもつ問題
（「吾輩は猫である」を読む）

文学的な文章を読むためには、言葉を手がかりにしながら文脈をたどることが大切です。文章の中の時間的、空間的な場面の展開、登場人物の相互関係や心情の変化、行動や情景の描写などに注意しながら読み進めていきましよう。その際、新しい言葉に出合ったときは、辞典を引くなどして意味を的確に捉えるようにしましよう。

幅広く文学作品に目を向け、新たなものの見方や考え方を発見したり、さまざまな視点から物事について考えられるようになっていたりする力をつけていくようにしましよう。

○ 解答は、問題用紙に記入します。言葉や文章で答える問題は、条件に注意して書くようにしましよう。

○ 解答を読んで、自分で答え合わせをすることもできます。文章で書く問題は、解答の例文を参考にしましよう。

解答

24

1 ア

2 A 「ふん」と感心して見せる。

（※A・Bは順不同。）

B 「うまくやったね」と喝采してやる。

3 (例1)

「はなはだ御しやすい猫である」と評価しており、「吾輩」は「黒」の機嫌をとるような接し方をしていることが分かる。私は、このような「吾輩」の接し方はとても賢いと思う。

(例2)

「腕力と勇氣とにいたってはとうてい黒の比較にはならない」と書かれていて、黒に敬意をもって接していることが分かります。相手の悪い面だけでなく、よい面にも目を向けることは大切なことだと思います。

(例3)

「元来黒は自慢をするだけにどこか足りないところがあって」と相手を見下すような接し方をしている。あまりよい気持ちがない。

※解答する際の三つのポイントを確認しよう！

【文章の一部】から、「吾輩」が「黒」を評価している表現を引用する

「吾輩」が「黒」にどのような接し方をしていることが分かるのかを書く
「吾輩」の接し方について、あなたの考えを具体的に書く

4

(例)

レビューに、「猫の視点から見た人間の姿を皮肉を交えながら、どこか滑稽に描いている」とありますが、この場面にも、それが感じられる表現があります。「しかし実際は、うちのものがいうような勤勉家ではない。」や、「読みかけてある本の上によだれをたらしている。」という表現からは、「吾輩」が「主人」のことを軽く見ていることが分かります。飼い主のことを尊敬していたら、こんなことは言わないはず。「吾輩」が現代にいたら、私たちのことをどう感じるのかが気になります。

※具体的な叙述に基づいて自分の考えを書いていること。

「令和三年度 全国学力・学習状況調査問題と授業アイデア例」より作成